

群馬県のどこでも いつでも ホスピスケアが受けられる

ねがい

群馬ホスピスケア研究会

会報 ねがい第93号

発行 2017. 11 .1

責任者 土屋徳昭

〒370-0872

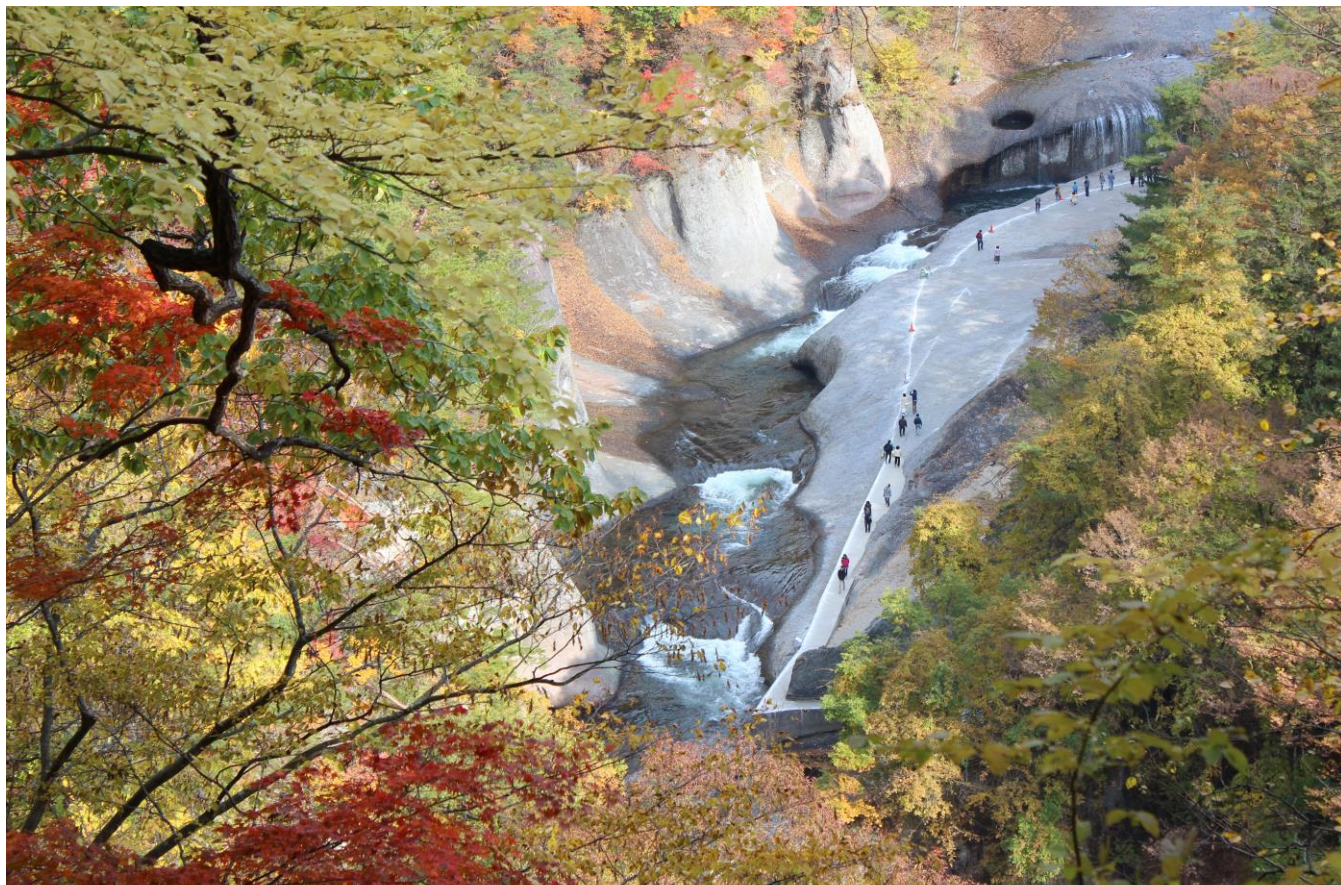
高崎市北久保町 10-9

電話027-353-1341

電話027-323-5824

郵便振替

00560-4-5287



ふきわれ
吹割の滝 国道120号（日本ロマンチック街道 沼田―いろは坂線）途中の景勝地

撮影者 森下悦子

撮影地 群馬県沼田市利根町（旧利根村）追貝 旧日光街道第3展望台より

本会の新しいホームページアドレス

[http:// www.normanet.ne.jp/~gun-hosp/](http://www.normanet.ne.jp/~gun-hosp/)

グラフ ボランティア便り 渋川医療センター・緩和ケア病棟	2-3
悲嘆に寄り添い20年	土屋・吉本 4
眞木和尚の悟りのおはなし（『一分で読めて一生忘れない悟りのおはなし』）より	4
ボランティアのページ 2017 春から夏へ 日本庭園に命名しました	5
随想 一日の重さ	吉本明美 6
患者体験 『弱気と強気 二人の自分』	藤野永次 7-9
悲嘆脱出法（あるTWより）	10
インフォメーション・分かち合いの会・地域がんサロンの日程	10
寄付ありがとう ほか	10

渋川医療センター 緩和ケア病棟ボランティアだより 2017年6月～2017年10月

6月 響け！癒しの音色



青柳・小田原コンビによるクラシック音楽の時間は、忙しさに急き立てられる医療スタッフにとっても大切な癒しの時間となっています。

7月 デビュー コール・アマビレ の 美しい 女声コーラス



今回デビューした女性コーラス、コール・アマビレのみなさます。旧赤城村のメンバーを中心とした本格派？の女性コーラスです。これから、緩和ケア病棟に素晴らしい歌声を運んでください。



8月 夏祭り 八木節踊り

かき氷 綿あめ フーセンヨーヨーつり



今年の夏祭りは、上州尾根下連（高崎市上室田）のお囃子と踊り指導で、病院スタッフ、お見舞いご家族、ボランティアが踊るという嗜好で行われました。ごちこなさもありますが、息を切らせての真剣な熱演でした。

9月 奏・オカリーナで 哀愁のメロデーを・・・



元群響の奏者を指導者に迎え、その上、「演奏者」みなさんの学習意欲が高いので演奏技量が格段に上達しています。南米のフォルクローレなど数曲演奏いただきました。

10月 初秋に爽やかな歌姫 そして ためになるおはなし



『子供がお母さんの絵を描くとみんな笑っている。母の国まへみは、人がどんなに辛い時も「幸せ」をもたらす魔法の力を持っている・・・』

コンサートは「スマイル」という曲から始まった。眞木さんのおはなしは早坂さんの歌と呼応し、ジーンと心に染みわたっていきます。

早坂さんはプロの音楽家として活動している。東日本大震災にも駆けつけ、歌の力で被災者を励まし、元気づけた。彼女の歌声には人の魂に触れる響きがある。その代表作がカッチーニのアヴェマリアだ。この歌声は、人の心を感動で浄化し、慈愛と平安の境地に導く力を与えてくれる。人は感極まること涙し、感情を表出する。

死別・悲嘆に寄り添い20年

Part 5

藤井効果

将棋の最年少棋主が話題のころ、病棟に自称最高齢棋主を目指して将棋を始めた方が居ました。毎日、新聞の詰将棋欄を見ては勉強しているのです。ある日、ボランティアに「挑戦状」が来ました。「対局願いたい」と。心得のあるメンバーがお相手することになりました。「三番勝負」と意気込んで臨んだ「最年長棋主」さん、二戦二敗でギブアップ。次の機会に向け研鑽が続きしました。三度ほど対局しましたが、だんだんに長考の時間が延び、そのまま入眠されることもあり。あの方、今も精進しておられるでしょうか。

土屋

変わるもの 変わらないもの

歳は毎年一つずつ増えていく。高齢になってからの一年という時間の流れは色々と変化する。身体面においても具体的な変化を伴う。人の思いを超えて時にそれは容赦ない。

奥様を亡くされて当会の分かち合いの会に参加し始め、もう何年も経過している方がいる。配偶者の死別そのものは時間の流れを味方にもしながら、また、自身の努力もあり、受け止められ、亡き後の生活も落ち着いてきた頃、加齢に伴いご自身の体調不良が続いた。数年が経過し、ご自身の判断で施設入所を選択され、身辺整理もひと段落した。

元来、前向き、勤勉なのだと思うが、今も、気持ちの若さ、脳トレ、体力維持に余念がない。頭を使わないと「ボケる！」と言い、施設職員の名前をフルネームで覚えたり、ワープロで文章を書いたり、かかりつけ医に行く時には経過報告を作っていたり、私が遊びに行くとき英会話したりと、かなり頭を使われている。リハビリにも励み、出来る限り歩いて日常の用事をこなされている。

肉体が持つ可能性は変化する。老いを感じるのはその部分だ。変化していくことを受け入れないと自分自身の気持ちが辛くなる。出来ないことを認める、変わっていくことを認める勇気が問われている。

一方で、この男性のようにこれまでの様々な事への向き合い方が、外的な変化があっても変わらずに生活を形作る要素の一つとなっている。考え方や価値観、生活信条が、前向きさを支えている。変わらずにその人の中にあるものがその人自身となっている。

病棟でも同様だ。昔から家族に感謝や信頼を寄せていた人はご自分が辛い状況にあってもいつも家族への感謝や思いを口にされている。本当に人には其々の生き様がある。それをごまかす事は多分できないような気がする。変わるものと変わらないもの、どちらも自分自身を表すと思う。吉本美明

眞木和尚の悟りのお話し

家には酉がいっぱい居ます

2017年は酉年でした。鳥は朝一番に時を告げることから、新しいスタートを呼び掛け、幸運をもたらすと言われていきます。

ところで、この「酉」という字の成り立ちをご存知ですか？

「酉」という字は、実は「酒つぼ」の形をかたどった字で、意味としては「成熟」を表すそうです。なるほど、字を見つめると、「酒の入った末広りの壺にふたが乗った」ような形に見えてきますよね。それで、酉を含んだ漢字を見つけてみると、更に納得。家の中には、酉がいっぱい住んでました。お酒をはじめ、焼酎、味噌、お酢、醤油。そして、酵母、醸造、発酵、芳醇、お酌に、酌量、酔っ払い（これは私ですが…）。

文字の成り立ちどおりの言葉がいっぱいで、この文字が「壺の中の液体が徐々に変化し成熟すること」を意味するのが、よく分かります。

「酉」年というと、なんとなく活動的に羽ばたく年、というイメージがありますが、文字の成り立ちから考えると、

今年は「自分自身をジックリ熟成していく年」（一肉体という壺の中にある我が魂を、どんな風に変化成長させていくか）、という受け止め方もできるのではないのでしょうか？最近では、長期間カメに貯蔵された焼酎の古酒や、お酢がブームになっていますが、私たちもそれぞれ、生きてきた年数だけの「〇〇年物」の存在です。

酒樽や壺の中で、見事に発酵、醸造されたお酒が、芳醇な香りを発するように、魂の成熟した人もまた、いいお酒同様、「表情や言葉がまろやかで深みがあり、人を酔わせる」魅力があります。お互いに個性的な「味のある」人間を目指しましょう！

蛇足ながら（酉年なのに）、仏教では悟りが深まっていく姿を、牛乳がヨーグルトやバター・チーズへと、変化精製する味の変化にたとえていて、その最高を「醍醐味＝だいごみ」（おっと、ここにも酉が…）と言います。そして暦学上、「酉の刻」は「午後五時前後」、「酉の方角」は「西」です。

私も酉年にちなみ、沈む夕日を眺めながら、西方浄土に思いを馳せ、友と静かに酒を酌み交わし、人生の醍醐味をいっぱい味わいたいと思います。

眞木興空

この随筆は眞木僧侶毎週一話、メルマガに著した折々の随想を10年前にまとめて一冊にした『一分で読めて一生忘れない 悟りのお話し』という著書から転載させていただきました。

ぼらんていあ の ページ 2017 春から 夏へ



3月、春まだ浅いころ、チューリップやパンジー中心の花壇

(写真左下) が、8月、夏を象徴する花、百日草がでんと居座る花畑にすっかり模様変わりました(写真右下)。それに付けても、夏、大変なのは皆さんもご経験の草むしりです。30度を超える暑さの中でもこの作業をしなければきれいな花を守れません。

今年、この場所に移って2年目、ようやくボランティアの努力が実って見事な花壇になりました。

そして、ついに日本庭園に待望の名前が着きました。風の強い白井の里、中心作者の一文字を冠した『清風苑』、しっかりと石に刻みしました。



一日の重さ

吉本明美



「もう少しで良いから自分に自信を持ちたい。」この言葉は、がんサロンで患者さんから聞いたものだ。術後の抗がん剤治療中で副作用も強く、辛い日々の最中だった。「色んな事にみんな負けている。副作用にも負けている、自分にも負けている。こんなに弱いとは思っていなかった…」など、自分を責める言葉がしばらく続いた。この方は十分戦う気持ちを持って、日々の辛さに向き合っているからこそ「負けている」と自分を責めた。周囲がどんな風に慰めたとしても、本人の感じ方、自己評価はそれぞれだ。私は彼女の、おそらくこれまでも、自分に高いハードルを設定して色々と頑張ってきた姿を目に浮かべた。何回となくサロンに来て、その日その日の体調で、少し気持ちにゆとりが出たり、又自分を責めたりの繰り返しだった。やがて治療も終り、退院される時、当時を振り返って「病気になって自分の弱さを知った感じです。これって、これから先の私には案外良いことかもしれない。うまく言えないけど、そんな気がします」と話してくれた。「先々の心配は、していだらきがない程いっぱいある。でも今は、こうやって歩く練習が出来ていることを大事にしたい」別の患者さんの言葉である。又、ある男性患者さんは「過去をあれこれ振り返って分析しても、今はもうあまり意味がないように思う。それよりも、今日のこの今の時間、僕がどれだけ昨日より気持ちよく過ごせるか、お腹の調子が落ち着くか、娘が来る迄待ってられるようにどれだけ食べられるかってことの方が大事なんです。」と、話されていた。「やがては死ぬ存在の自分達という感覚と、死ぬことが現実味を帯びてきた人達とは、英語と日本語くらい違うんです。朝から夜まですべての事が違う…このことが少しでもわかっていたら、もっと患者さんに違う話が出来ていたと思う。」と陰しい表情で話してくれた人がいた。今もその時の会話をはっきりと記憶している、と言うより忘れることができない。そう、私達は実際になってみないと分からない事だらけの中で生活しているような気がする。様々な体験はその人固有のもので、全く同じ感じ方、傷つき方、反応を持つ事は出来ない。個々人が捉える「大切なもの」も、勿論それぞれに違う。

ところ変わって、ある街の絵画展会場。ご主人を亡くされてやはり分かち合いの会に暫くの間通ってこられた方の秋季展の案内が今年も来た。半年ほど会っていなかった

少し気分転換をしたいので出かけることにした。私は絵が描けない。が、観ることは大好きだ。読書と並行して長い間続いている趣味の一つである。毎年拝見させてもらっているし、ご自宅でも作品を観させてもらっている。今年の彼女の描いた絵が、なんだか違う。最初に観た花の絵がとても良い。専門的なことは全く知らないが、私なりに観た時、昨年より絵に膨らみがあって、かつ柔らかい。全体に優しくてほっこりとさせてくれた。違う、昨年のタッチとなんとか違う。続く風景画は銀杏の木と、下の緩やかな曲線を描く道に落ちた落ち葉がまるでかさかさとした音を立てるような感じがした。こちらもしっかり柔らかい印象だった。この会報を美術の専門家がもし、読んでおられるとしたら、「何を素人が…」と一笑に付されるであろうが、描いた彼女の今の落ち着いた中での生活と、ご主人亡き後の怒涛の日々を超えて、ご自分なりに生きてこられたうえでの、やっとたどり着いた穏やかで緩やかな時間の表れだと思った。絵にその人の変化が重なった。短い時間の中でそのことをふと考えた時に泣きそうになった。「やまない雨はない。抜けられないトンネルもない。」そうなんだな…と実感したひと時だった。今年最後のこの会報は締めくくりにふさわしい原稿を書かなくちゃ…と思っていたが、やめにしよう。患者さん、ご家族、ご遺族の生の声を皆さんに分ち合う方が、私の思うナンタラカンタラを書くよりずっと良い。

今年もここに今回書かせてもらったエピソードも含め、沢山の方々から色々を考えさせて頂いた。亡くなられた方々も含め、本当に出会いに感謝である。言葉を受け止め、聴くというかわりの中で、今年もたくさん考え、共に泣き、時に笑い、喜び、一人悩んだ。仲間の言葉に励まされたこともあった。今年も、かけがえのない命に思いをはせた。

出会ったすべての方々に感謝。もうすぐまた、一年が終わる。願わくは、来年もまた、その笑顔、そのひたむきさ、その頑張り、その悲しみや弱さを、一緒に分かち合うことができますように。一年間有り難うございました。皆さんに会えて本当に良かった。そして良い新年を迎えられますよう、心から祈っています。



私の がん体験

弱気と勝気 二人の自分

心が崩れかけた時、

そっと手を差し伸べ支えてくれたのは看護師さん



高崎市

藤野永次

はじめに

がん看護専門のプロフェッショナルの皆さんが「より良い看護を」とフォーラムを開催し、私に話す機会を与えて下さり恐縮しています。がんサバイバーが現実をどう捉え何を感じているか？私自身の体験をお話ししたいと思います。

その前に、昨年末、国会でがん対策基本法が改正されました。それを機に、メディアも頻繁に情報発信しています。がん患者の就労対策、受動喫煙問題など、また、歌舞伎役者市川海老蔵さんの奥さん小林麻央さんがご自身のがんをブログで公開、夫婦で支え合う様子が伝えられ、なにか、ほほえましく感じます。一方、NK議員は、がんを患い闘病中の奥さんをよそに、不倫相手の女性とハワイで結婚写真を撮るという大ハレンチ！！「がん患者は仕事なくていい」と無責任な発言のON議員。これらの人と発言には、がん患者として強い憤りを感じます。

本日のテーマ「どう実践するスピリチュアルケア」は、正直私には難しく分かりません。過日開催されたセミナーで、群大のT先生の講演をお聞きする機会がありました。講演後私は自身の病名、治療、副作用など現状をお話しし質問すると同時に、「スピリチュアルケアとはどういうことですか」と尋ねました。人生の意味、生きる苦悩、死への恐怖・・・と聞きましたが、がんサバイバーとしては常に心のどこかに棘のように刺さっていて、できれば最も遠ざけたい、考えたくない事柄だと思っていました。

私は

終戦直後の食糧難時代に幼少期を過ごし、競争社会を生き抜いてきた団塊の世代の申し子の一人です。全国各地、群馬からも集団就職で東京に人が集まり、高度成長期を経て日本中がバブルに浮かれました。新幹線開通、高速道路建設、東京オリンピックと、日本は目覚ましい経済成長を遂げました。銀座、赤坂、六本木、新宿に超ミニスカートのボディコン、ワンレン、ピンヒールの女性たちがマハラジャやディスコで夜明けまで踊り、大盛況、華々しさがはじけたバブル期。やがて、低迷する時代へ。私はこれらの時代を仕事一筋に生き、抜き、そして疲弊し定年を迎えました。

高崎市在住 69 歳、血管年齢は 85 歳、現在、ストレスのないシングルライフを謳歌しています。二人の息子夫婦の間に居る五人の孫娘にはただただ優しいだけの「ジイジ」です。



何の前触れもなく

還暦を過ぎ、やっと一息ついたかなと安堵して間もなく、ある日突然、「がんです」と宣告されました。悪性リンパ腫と言われても何のことやらチンプンカンプンでした。若い時から病気という病気にせよ、まして、入院の経験さえ一度もなかった私がなぜ？

今から8年前、血液がん悪性リンパ腫になりました。のんびりとゴルフ、ドライブを楽しむ定年後の生活をしていたある日、右脚付け根に豆粒ほどのしこりを見つけました。やがて、百円玉ほどになり、寝ても気になり、シクシク痛みも出てきました。不審に思い、普段、肝機能と血圧の検査を定期的に受けていた病院の内科医に見ていただいたところ、精密検査を受けるよう勧められ、三病院が提示されました。私は判断ができないのでお任せし紹介状を書いていただきました。西G病院でこの道の一人者と言われる方宛でした。早速受診に行くと、その日現れたのは、大学から出向しているという息子くらいの年恰好の医者でした。その医師が突然「がんです！」と。しかも、余命まで宣告されたのです。頭の中が真っ白とはこの時のような状態のことをいうのだと、当時の思い出します。

知らない世界へ

告知の折、医師は病名、病状について、立て板に水を流すかのように、専門用語を次々に捲くし立てます。ほとんどすべてが理解不能でしたが、切除手術、放射線も効かず、抗がん剤治療しかないということだけは聞き取れました。が、さて、抗がん剤治療とはどういうものをどういうふうに使おうとどうなるかということについては、がんを他人の事と思い続けてきた私には全く未知の世界でした。これから始まる治療への不安と恐怖を心が押しつぶされそうになるほど感じ、主治医があきれるほど何度も何度も説明を求めました。そんな時、受け持ち看護師さんが、「納得できるまで聞いて下さい」とアドバイスして下さったことで、長期入院の始まりを受け入れ、この人たちにすべてを託そうと覚悟しました。同室の先輩が吐き気、脱毛、高熱などの副作用に悩み苦しみ、耐えている姿を見て、「俺は負けない！」とつぶやいたら、「我慢はダメ！辛い時はすぐに伝えて！」と看護師さんが耳打ちしてくれ、弱気と勝気で動揺する私をずうーと支えてくださいました。

入院中の体験

入院の血液内科専門病棟には、白血病、骨髄腫、悪性リンパ腫の患者が、ほとんど抗がん剤治療をしています。中には、あまりの辛さに耐えきれず治療を断念し退院していく患者も数多くいました。急な熱発から息を引き取ったがん友も眼のあたりにしてきました。

私のがんについて理解し学んだのは同室のがん友の先輩からです。薬の種類、副作用、院内での生活、これら全てのことが体験から話されるので、これから治療が始まる私にとっ

て、勇気と共感になり、「これならできるかな」という気になりました。2週間は検査と説明（インフォームドコンセント）の繰り返しで、主治医もあきれていました。Rチョップ療法が必要だということを理解し、書類にサイン、やっと一息つきましたが、心身ともに疲れ果てていました。

治療開始

7か月の入院中8クール（8回）のRチョップ療法を受けました。1クール3週間、21日かかるので、それだけでも大変でした。ステージⅢBの場合、最初の予定は4クール、長くて6クール、晩秋、落ち葉舞う頃入院し、翌年、桜咲くころには退院を夢見て治療に入りました。

西G病院は周囲の自然環境の素晴らしい、歴史と伝統のある、古びたとても暗く、冬の寒さは格別な病院でした。そこで一冬越しました。

治療は当時からチーム医療が行われ、血液内科の専門医が前週病棟カンファレンスルームでスタッフとミーティングを重ね、熱心に取り組んで下さいました。なにより、受け持ち看護師はじめ看護師の皆さんは全員が優しく、我儘な私を叱咤激励してくれました。時に、ナースコールで看護師に手間をかけては悪いと我慢していたら、私の状態を察し、隣の患者がナースコールして呼びました。二人も駆けつけてくれ、「我慢してはいけません！」と注意されました。気遣いが裏目に出た経験でした。

抗がん剤治療は毎クールごと、7日目くらいに微熱が出、夕方には38～39度くらいまで上がります。当然、その日の夕食は摂れません。夜勤の看護師さんが主治医と連絡を取り解熱剤を注射、それで少し落ち着きますが、体力は減退します。

翌朝には主治医が「採血します」と来て、対処してくれました。なぜか主治医の顔を見ると安心するのです。

手紙

病院では夜間、早い時間に暖房が止まってしまうのです。12月のある夜、歴史的価値あるこのレガシー病院で「サッシの隙間から寒風が吹きこみ寒い」と一人のお婆ちゃんと言っているのを聞き看護師長さんに手紙を書きました。すぐに、総務課長と設備担当責任者が私のところに来て、「暖房は決められた時間で止めています」と説明しました。私は、「病棟は止まるけど、ナースステーションには別のエアコンがあり暖かいですね」と言いました。すると以後、暖房の時間が延長になりました。「私はクレーマーではありません」と言うのと、苦笑していました。

病院はすべての患者の立場になりサービスして欲しいと思いますし、患者は、そういう病院の期待に応えるよう、諦めずに治療に専念することが必要だと思いました。



出来事 あれ これ

私と相向かいのベッドに一つ年下の同病でステージⅡの患者さんが居ました。体調の良かった年末のある日二人で散歩に出かけ、途中で一服、気持ちよく戻ってきたのですが、その日の夕方、その友が発熱し、夕食も手付かずで横になっていました。深夜、高熱になり、意識も低下、スタッフが慌てて処置し担当医の来るのを待ち、個室に移されました。折から晦日、元旦にあたり、外泊で家に帰ったと聞かされましたが、心配で仕方ありませんでした。正月明けの4日朝、看護師に友のことを尋ねましたが、病院のマニュアル通りの冷たい返事で応えてくれませんでした。奥さんと家族が居たので聞くと、人口呼吸器で話ができないということでした。それから10日ほど後、友の計報を知らされました。同室の仲間みんな互いに励まし合い、助け合い、家族の懸命な支えと望みを背負って治療と向き合い、闘っている。その仲間を見送るほど情けなく、悔しく辛いことはないのです。もしかして、次は自分の番になりはしないかと、何度涙を流したことでしょう。

彼とは同室のがん友みんなでお別れをさせてもらいました。



原因不明の高熱で意識が遠のき無菌室に移されたこともあり、「まだ、がんの親分が隠れ潜んでいるから」と自分に言い聞かせ、主治医や看護師、がん友に励まされ、治療を続けていましたが、本当は逃げ出したい自分が常に居ました。4月のある日、誕生日を迎えた無菌室にメールがありました。「早く帰ってこい！」がん友からでした。

またこんなこともありました。点滴で横たわっている私に、「一服行くかい？」と。二人、いそいそと出かけると、ナースステーションの前で「ストップ」が。二人は当然、注意を受けるものと思っていました。ところが、「カゼでも引いたら大変だから」と、マスク、手袋、ニット帽、ダウンコートを手渡して「完全防備してね！」と送りだしてくれました。これにはさすがに頭が下がりました。「ありがとうございました！！」

退院へ だが...

6クールが済んだら退院と決め、祝いの日時、場所を家族が段取りしてくれました。ところが、最後のPET・CTの結果、あと2クール追加となり、退院は繰り延べになりました。

準備している退院祝い話をすると、「お酒はほどほどに、10時までには帰院すること」を条件に許可が出ました。そして、7か月210日の入院生活から本当に退院する日を迎えました。この間、高熱で何度も無菌室の孤独な戦いを強いられ、带状疱疹に見舞われ、決して順風満帆な入院生活でなかった私を支えて下さったのは、心から信頼できお任せできた主治医と、時に、悪いことは悪いと真剣に怒り、普段は心優しい看護師の皆さんのおかげでした。涙でクシャクシャになりながら、主治医と固い握手を交わし、看護師と何度も何度もハグを繰り返しての退院となりました。

私たちは良い主治医を選ぶことはできませんが、偶然巡り合った医師と良い関係を築くことはできます。その意味で私が西G病院で出会った当該科の医師は、私にとってのスーパードクターでした。

8年が経過し、現在は「びあサポぐんま」高崎がんサロンに発足当初から参加し、サポーターの皆さんやがんで悩む本人とその家族のみなさんのそれぞれの貴重な体験談などを聴き、話し合い、交流を深めています。

楽しい毎日を送っています。

リタイヤ後の私の夢はこれから!!



“死別体験者の集い・分かち合いの会”

毎月第2日曜日

時間：14：00～16：00

場所：群馬県社会福祉総合センター

(JR新前橋駅東口から前橋寄り徒歩約5分)

☎ 027-255-6000

■誰でも予約なしに参加できます。参加費無料。

開催日	開催日	開催日	開催日
11月11日 (土)	12月10日	2018 1月14日	2月11日
3月11日	4月8日	5月13日	6月10日

インフォメーション

「悲しみは、自分で癒す。それには、悲しみに向き合うこと、語ること、伝えることが大切です。」「悲しみを分かち合うことで悲嘆が軽減するだけでなく、死者からの沢山の贈り物が届けられていることに気づいてもらい、亡き人と自分の人生全体を展望して、送られているものを探し出すことを支援する。」 まだまだ長い時間がかかると思います。本当にグリーフケアは、本人自身が立ち上がらないと先が見えません。今、悲しみにくれている人、あなたは、1人ではありません。一筋の希望が、見えてくるよう、ゆっくりと無理せず一緒に歩いていきませんか。色づいたイチョウの葉が、輝きながら空を舞っていました。まるでエールを送っているかのように。。。 (さわやかちば県民プラザで開催された水野治太郎氏の講演を聞いたという方のTW感想文より引)

地域がんサロンぐんまの開催

高崎会場 高崎市総合福祉センター3階

高崎市末広町 115-1

☎027-370-8822

開催日 毎月第3日曜日

時間 13：00～15：00

前橋会場 群馬県立図書館

前橋市日吉町 1-9-1

☎027-231-3008

開催日 毎月第4日曜日

時間 13：00～15：00

太田会場 太田市福祉会館

太田市飯塚町 1549

開催日 毎月第1日曜日

時間 13：00～15：00

富岡会場 ふれあいの居場所「よりみち」

富岡市上黒岩 1879-1

☎0274-63-7427 (和田宅)

開催日 毎月第2日曜日

時間 13：00～15：00

新町会場 自遊空間「みちくさ」

高崎市新町 2147-18

開催日 毎月第2火曜日

時間 13：00～15：00

★どのサロンも、誰でも予約なしに自由に参加できます。

日本ホスピス在宅ケア研究会

第25回全国大会 in とかち大会

開催日 2018年9月15日(土) 16日(日)

帯広文化ホール・とかちプラザ

テーマ「思いをつなげるまちづくり～とどけますこの十勝から～」

教育セミナー

テーマ：地域における看取りの研修会

第1回 2017年12月3日(日) 午後

兵庫県姫路市

第2回 2018年3月18日(日) 午後

三重県津市 アスト津会議室

乳房再建について学び考えるサロン

日時 偶数月の第2土曜日 午後2時より

場所 開催会場が変更になりました。

新会場 群馬県立図書館

担当者 篠原敦子 090-6023-7026

詳細は上記にお電話ください。またホームページ参照情報は **シャロン前橋** で検索してください。

寄付の御礼 (2017. 7/15～日 2017.10 まで)

関口 進さま 依田 一枝さま

ありがとうございました。

郵便振替 00560-4-5287 群馬ホスピスケア研究会